佳作

ありがとうの理由

長崎県
雲仙市立多比良小学校 五年
本田 聖鷹

「はい…。」ぼくは、コーチの言葉を聞いてそう返事をするのが精一杯だった。ぼくは、七月に行われた、県サッカー協会のトレセンを初めて受けた。同じチームで同級生のワタルと一緒に。その結果がわかったのだ。ワタルは、合格、ぼくは、不合格。

毎日、コーチに「勝って泣け！勝って泣くほど努力しろ！」と言われているけど、やっぱり、悔しくて泣いた。コーチは、「次、頑張るんだ。」と言ってくれた。でも、ぼくは、毎日、自主練に付き合ってくれているお母さんに、言いづらくてその日は、「ただいま！」と、いつもより大きな声で家に帰った。

ぼくは、泣き顔を見られたくなくて、すぐにお風呂場へ行った。お風呂に入ると、台所のお母さんに聞こえるように、大きな声でイナズマイレブンの歌をうたった。

夕飯を食べ終わると、お母さんが「花火しようか。去年から置きっぱなしだけど大丈夫かな。」って言いながら、お父さんと二人で準備を始めた。いつも、九時過ぎたら、近所迷わくになるからって、花火をしないお母さんが珍しく張り切っていた。

「花火、し気ってなくて良かったね。」お母さんは、花火をしているぼくの頭をなでた。

「お母さん、ぼくね…。」と言いかけたとたん花火が消えてシーンとなった。また言いづらくなった。でも、ぼくは思い切って言った。

「県トレのメンバーに選ばれなかった…。」すると、お母さんは「そのくらいなんなのよ。次がある。それより泣きたい時はお風呂の中でもいいけど家族の前で泣け。」と言った。

「知ってたんだ…。」ぼくは、ほっとして、わんわん泣いた。また、お母さんが言った。

「きっと、コーチのお父さんが一番言いづらかったんじゃないの。」

「そっか！」ぼくは、コーチであるお父さんの顔を見た。お父さんの目は赤くなっていた。

「泣いたらすっきりするな！」お父さんはそう言って笑った。その日、たくさんのコーチたちがはげましてくれた。

「気にするな！」って中尾コーチ。

「辛い時はうまいもん食え。」って畑で作っているメロンをくれた辰田コーチ。

「あの時選ばれなくてよかったって思えるくらいの努力で自分をみがけ。」って国房コーチ。お父さん、お母さん、それからみんな、ありがとう。次のトレセンは、頑張る。ワタルには負けない。ワタルより強くなってみせる。そして、次のトレセンには、ワタルと一緒に選ばれたい。

お父さん、お母さん、こんな小さなぼくに色んなきもちを色んな方法で乗りこえる強さを教えてくれてありがとう。そして、はげましてくれる人がいることの幸せも一緒に教えてくれる、お父さんとお母さんの子供で、ぼくは、本当に良かった。ありがとう。